東海道中膝栗毛六編

上

へ13
4302
12

膝栗毛六編 序

長々ハし此作者のたぶれて支解ハ
心と作る長く。鼻の下ハ褌のさが里と
作くと長し。酒のおとゞ成ひくてハ切堅を
起掃るやうなるくりも長く。借金を
ひきざるるハ淋病やまるる外の小便

ヘ13
4302
12

早稲田大学
教育学部図書

湯川幸吉郎先生
寄贈図書

20523

<2000-248>

とりも長し。さふ何て猿栗毛の
尾に尾をひかして。其道中の今平
帰らば漸く五編目に至て伊勢路
に第もなれくと雖。例の長尾をひり
をきらして。京へ少し宮の新向を考へ。
下手の長噺をさへ編とし。法見物が

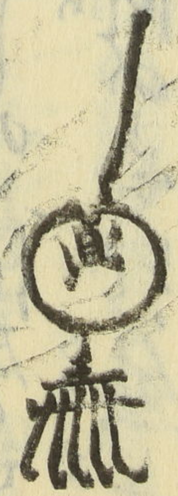
其世留の掃除しの紙屑を
黄色さとも。固なり所の長紙熊手
性。長姑ハおそれも第ちこと助。しとへ
其居の侍次兵衛とハ。隣国士の
弥次ゝ兵衛。世次て四國ハ思ひきとも。
京大坂ハあらりまへ。そこゞけの不法幸

抱。ほ一段のほどパイおかのこ

やまさとし志可伊布し

維時文化丁卯春正月

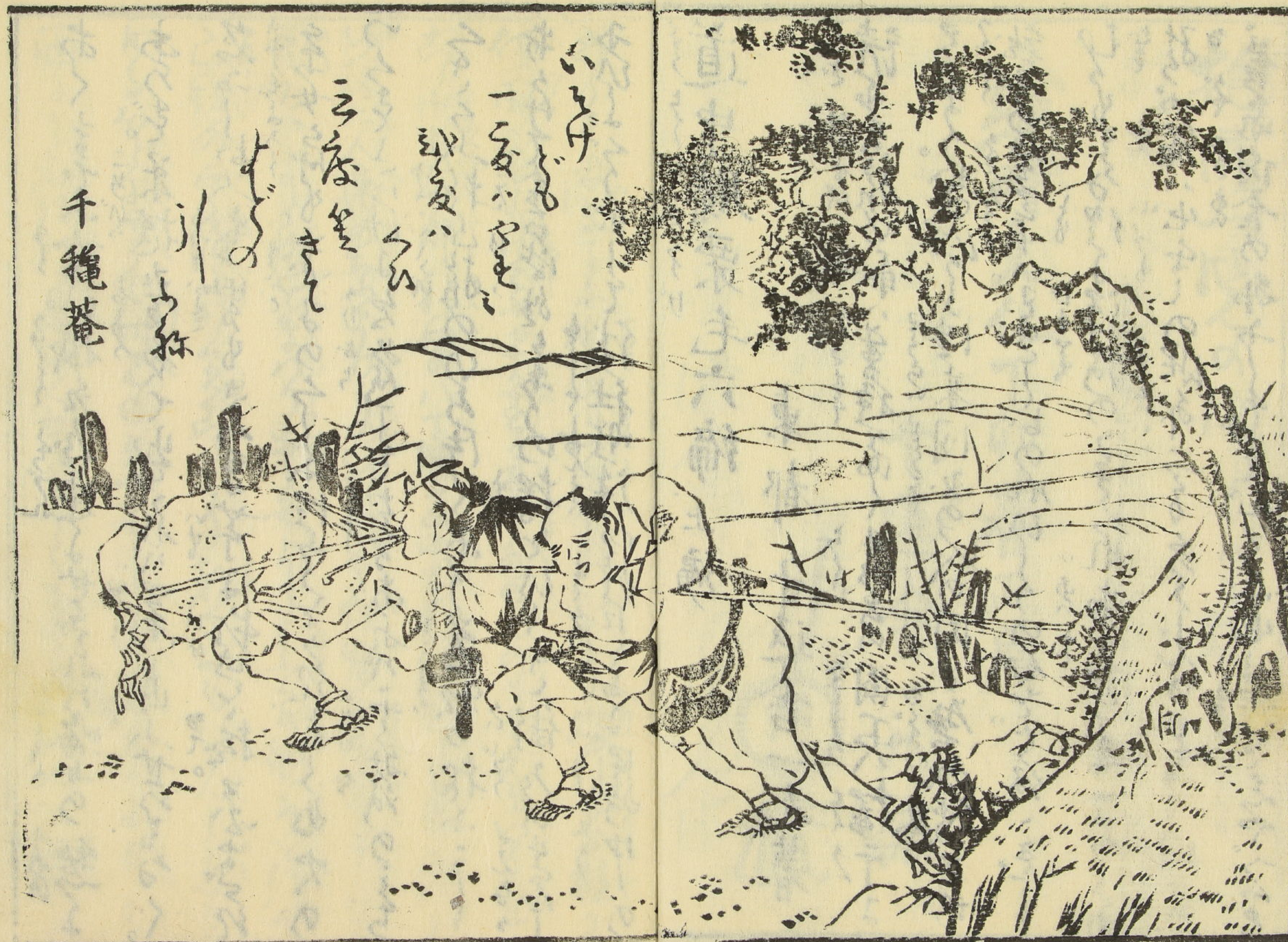
十返舎一九識



道中膝栗毛六編 上編

東都 十返舎一九著

諸国云旅の恥ハ書掻すゆく落ちの国不ハ様子ニ
ヨビまりおのづから性来同国の人の同と懸め。彼ヨリ
執事の筆下ハ日ぎしておのれひとりの心をくるこそし
むるもこそ俗に譯字の日ぎくれおもの末まくしに
殆ぶ縁ハ出来しの性外二万ぶうじんの来ゆり同士ハ
長来附合の外にして。そ心くに出る縁をしやべる。


千穐菴

あくまでに喰ひ撤れ乃連にせざれば晦かの愁に
ありぎ。菜摘春夜て出ざれば鶯追ふせいもなく。
名ふしお人春男もさつまぎ芋に抱き。公ぎざれ
京女ら所も。芝子のくらに法ふりとかれまらぬ火の
つくをこいけに名落して走るあれば二十年後のこちら
くさくふ。抱山脇ののろ法くあり並松の根にこし
折かけて金口些姓くまりの揚をひらきて。街道の生事
まひよぐり出して徳社明洋の路にとふる。異時中の

ありさ母まことに命の法濯の川あり。殺川草鞋に
何国までも口にまかせる雲の名のこのしてえもいはれまこ
ちに東の都。稲田の八丁陵を出まむ。活ひら生来ハ八と
いふ二人連のちまりけりの。神風や伊勢を出るよりいさ
成のかまのら後をまいり。歩母よりちふれ衛道と称て
山様のうち浴にかまさまつより都におもむくしるべき
ひるかぐにやうて伏見の京だしにいたりけるに日も
雨にかくれ山本の人とまやく。下里船の人と集る

無理の事ゝくやうしく〻世ゝく今出る事ゝや。のらん
せんかい。大坂の八軒家舟じや。のてうんせんかい。ハテこれか
かの淀川の夜ふけぶる。ナントきて八。来ならさ給へ又おもる
つりりて来たが。いつそのこと。此舟にの門で。大坂から さ給へ
やらかそふか〻それもよかあり。まと来合もありやきとか〻そふ
たらいの。来ならまやうのらんせ。いつきに出ませうい。コーく
日らじといてのらんせ。来られ来けられしやる〻エー仙とぬか
来ゝかるきのつ来ゝべらぶらぶこ〻ー小八。手めの法とも

いつまよはおれが風呂屋につくんでおこふ〻せんにうさん。
コリヤアごん人さまのいぶ〻そこる坂さ舟の様きえ割めんせ
漢〻〻始めんなせい。ヤア来いらる トうるがらヨもの〻コリヤ来らう
なへるりこゝまゐる
法めらきろ。無理さん。ふらんひらかさんせ〻ツレ〻ろんせ。
せ〻こうる来いかいる。下ふねてくんせ。ひ日かくさかいおさん
〻鉄かいなきれ。鉄ハよごぎくりまきとる〻ころうきこう
わちく〻〻ハんぎけよごぎりまきとかいる。あんぎいおし
く
ト此うちせんどうこも。舟ふとる。ふいて来るひざわきに出ることゝ〻小舟ハ追風に帆かけて

ぐしる。是れへこぼれて湯をあびせる。ソウレ ソレさへ ちよんだらへ
コリヤ是ら要があるてふろがみらん是い有合のせんどうが云
中気ちよつと待ちやう 儒者ぞあろ博士めが是いさア〳〵ゴッタ
勝手やおろぞいの〳〵〳〵 平堅なるある云ぞよろゐてぬる
さらんか。今のうちわんぞよらせんと 味能湯も合がみるある
さらい。京の人へコレも貴い。おかし 通てらさへ世藉のうちるいし
うつてもやかる 大坂の人へコリヤ左風にあ 京へ金へおかすし
何しやろく不性してくれるさへ 京へよいるいるおまへへ伝八

ござるいなへ 大坂 コレじや天満 京へおいなぞよんだりのしぬい。
下戸花ことはや。てトらで伊るとひよつとりさんうん
おみ。毛きれの人へコリヤよろしい。船中の様ぶり同さるしふあんさ 彼方
去る。ひよつて 露盤算用よつよからうんどもい
おさいのりんきがが。能名川原のからぶしまつらでらう 南風 算
さしおつきりでもやろみないよう。越後の人へ コリヤ 兄 とらいてぞれ
みそしもいいちどのりんぶ。越後のあんみやさかみしえ
そしてのそしも 松坂でもくるえだん

〽ところへおかしら〽でアホ係のおあしらいもじやあるせん。ながさきの人
〽よう〳〵。それしとやらかしたいトむかしなきさまくるしき〽おまへよりさく〳〵
はちまよふりまくて。よんかよりまんまきちぎやうんを。
コリヤごんくが難ちがう掴ぶ也それでもそうちやうきぬ
おけく〳〵。コリヤく〳〵ちやんじやいる〽イヨく〳〵きうそけじや
ながさきの人〽こうしても男べんえなされう トコトン〳〵とさやしそ
それさうしやい〽よう〳〵合点おなしの〽のり合〽トコトン〳〵
長崎ご〽おちなよう〳〵かんざますでさらおちよな

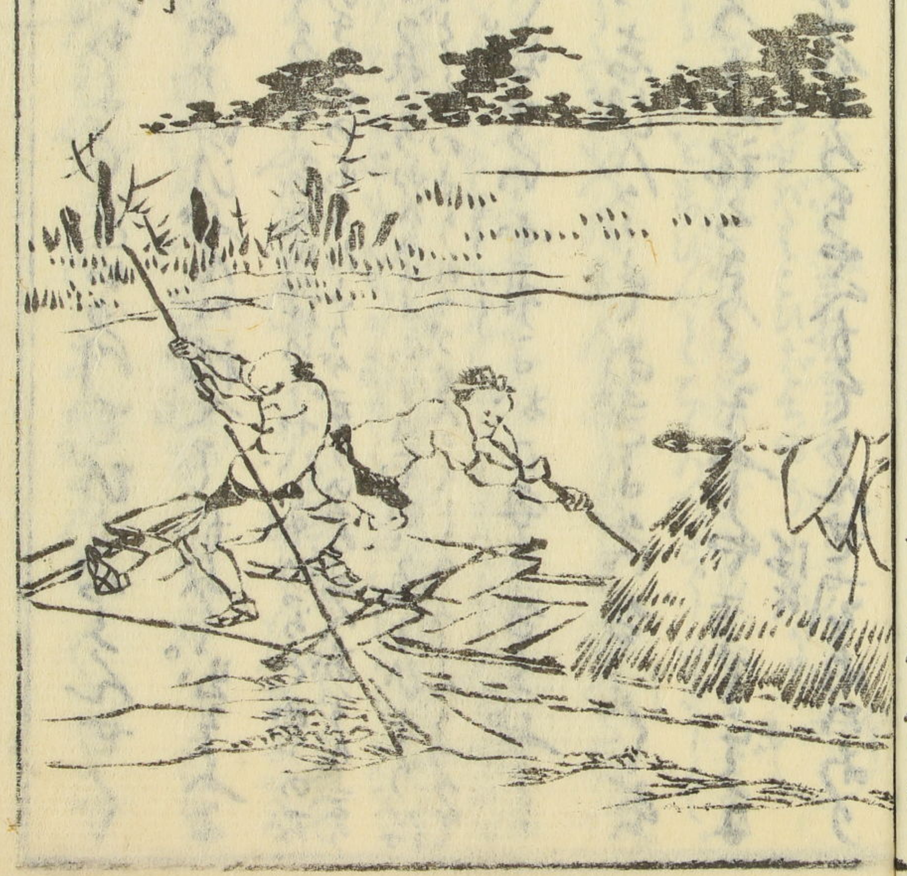
のり合〽トコトン〳〵 長崎ご〽ありがたい一だんまいずきの〳〵と
のり合〽トコトン〳〵 長崎ご〽ゆうしきさうそれがなく六百文でおやさ
〽トコトン〳〵〽いつ〳〵おかしくく〽イヤ〳〵その地おあふ他ぞ座
道中はよしやらい〽ツリヤもよ路ふ住轉号。ちやんでも
ちつとやりやさとどて。雲やアちんなものへ。絲かしもし
まじ舞へ〽おまへのともゆへとへよふが出るちやあう絲
なし。えぞ役失やりちかされ〽一色色も二十や三十なうり
へつらひやきり維西よ。僧と助ふうはあらうや。るる悲屋よ

志やせう。志ひし志ぐ役者ハ。おめぐさにやア コラ様へから
法ゆゑ様へ 大坂 ハラ 志ハ己いのひとつゆり なきまし 浦江 こそじやア
様が 声色 ハ 志ぐでも一ぜんとら 男さ。誰でもうしろと
うとふ人があると。まろぢり ゆりてアルせるがなア 来 ハ しろとふとハ
味出しのてうハる。こしやろこハ口三陰志や チツンチン こやし
これハ出志ぐの 塒所 やふきや 所よ名もとうれ。やくしや
これいろハ ぞふ志ゆハ なこれじゆハ な松本の事ハ 命で世ハ
チンチン 合 イヨ 松りとヲ 浦江 まんまとうぢひしろさ 此一 あん

旦きくあやまやア 出世のまがる重太郎 紫鉢 ぐらしゆうじ
来 コリヤ やくたんじやこしやまぐるゐ云ゆ身ぬて。此ゆ戻つて
こハなうる 君 至ハてるゆ。とうせれ志やないもせんもの
大坂 こしひとつやろこハの 来 ハ 様つうでけませぬきて又
つれの役者 クロハ ふんじゆハな 大坂 ゆうぢり 今のじやト 此太坂 りのハ
ふぐふもぬしこハいろもまんざうでな
ロれバ ぞさ かんりもそのまゝ ふらふ まんまとうぢひしろさ 此一
くらんこれきへあやまやア 出世のまがる重太郎 紫鉢 ぐらしゆうじ
けなん。トハ 今 個法 合 イヨ かうらいやア 来 コリヤ きまとい く。

大坂
おさかのかくさのがやんまじや。おまいの者ある荒所やとれさ
しんこいな「きこえんすがぶ。コリヤア 伝弘 松本 のもので。
葉ばらが牛子の胴ばらがこれ見うぶ「ぞんなちろちや
あろぞいな ハーー ト 松本 浅ばらのちんぶのとかうしかう 笑ふ
浅ばれ きよけてぶんすり 此内 舟ハとや 浅と 笑ふ
「浅 これよきこ八ちんごとをこまれてふ」このなまくこ
小便まれがよろこものと。例のしをり。船でれぞふもあぶ
ちくてしまふん。こまろこものぶコレ舟ばさん。ちよりくり
舟をつけてかしひてへの「あがるのかいの「せうだえん く

雑子
なしくや
夕水の
残る
浅堤
東寧舎
一河



やくふんじや　トそこ〳〵さぐりまへて、ひだちの出をとつけなはらへし
小ぞうちんをこすもしもどらなだるまがらさげ、まび
しなよとりて〽ヤアコリヤ何じやれ。リア茶をとくつけたで。くわへる
入れておきてわくさをふんや　トいひつ、其かの石のきまひしなよと出、
へうちあけて其なひまくら樽のさけを　沢市しぶきんごせうべてと川の中
あけてかめのぞちのうへなかけるがく　〽モシ惡どのおあつさけ
ひとくちごぶ其身いる　〽コレハおさしなさでござれ屋を紛。
りんきよ〽りんでけさをふじや　トさいかくのふくかるく出しついで　〽トレ
おらん兄まま其まいハ。イヤと呑ハ。けしいな香がきつくべつく
ありそ湯がこしなるのか。おめやそこやあくまれ。ひとう

おまへのんでみなそこぶんせ　トきさハきかへハイとれへヲトくし
トいひつけてぶんとのんでさなひしがかのちうちあがきまとよみて、へん石要び
のまうさけてぐうへかもりひなかうけせさうくしてなでさまう〳〵
〽イイなぞまやさ〽おつれのおさへあげてぶんせ〽さんなう
沢市さん。ソレ　トさらびさとけへさぞ沢市へいせへちくようと紙を、かんを
かぎまおかひ兄でもおれハおれがせうべんをくさ
其びんぶが。それでさけのんでまとうらいへぶんあしくものでござりしハおおが
そこうで其びんとかゝりつてせうぶんまてあか何ふしくもごんぶとくさ
とんのうちぶかすがうゑとまらめてりてもおかしきさてくらめをとをかとあらぶふ
あのうちのさけをかハがのこうろとぞうごそとかくかわしく其うしらもへ四返其
沢市　ハなさうかきと〽イヤおいらアはめんぶかかせうとよかいか湯がのさ
まし　ぬれだ
さうづき
うくら。〽其ゐあきびようハイとれへあげませう　ゑきよ〽あがらん

のかいな〔ゆハ〕十二あびるくらいさ。ほかさん。ちゃぜのまゝ稲へさけと
いふと。一だんは咽(のど)をづいくまるおめんが。コリヤア何でも。是ん
ちゆだ云へ〔いんきよ〕〔ハ〕ア きえることがあるといの。今そろちやのおそ
がくらがりで志びんとまちがそ。このなかへ山目(さうよう)志こうや
さんせんかいの。ぞふもせうようくさんとおりふるが。コリヤお
まい。そじやさうい。のまんのじやあるぞい〔ゆハ〕〔ソ〕りや志れや
せん素(ふれ)名(な)のことでも。此人が船の中で小便(さうべん)して。大さい
ぎをかりやしこそのくらへの蒸(そうしう)あれ。志りゆん人さ。そまこと

稲へ。ゲエイく〔いんきよ〕〔ぞ〕うりこそ。きびしきよ何か一ツ。ぞれあると
おりふるが。こしや又。此〔童〕ころめが。名入れておきかつてしゆふ
て。川へおろこが。ぞふでもせうようのおぞりがのこ川て
あつこものじやあるぞい〔ゆハ〕〔ん〕んごとろこ。むゆがむかくまる。
きよ〔いん〕〔ア〕さまや。ゲエイく。ちれよ背中(せなか)へ入れてくるもア
むさやのゲエイく〔ほれ〕〔これ〕いおきのどくな。モシ何ぞ茶(くさう)でも
あがりやし。志りし小便のあろこにハ何がよかろふ志らん。
モシく。ぞちつこぞ丸(ぐんや)茶でも出(どしよぢ)不持ちなら。山口さんまし。

のり合
「ハイ」ぞふも。せうべんのおろうこま。よいくきりいかちませんこい
「ソリヤア」とまろうこりのぞ「ゆハ」「ほんさん」白をちろしまくいて
くんな「ほん」どふまろ「ゆハ」せうべんと「ほん」さるのう「ゆハ」たくのぶいな「ほん」ドレ
ふなべりへ。ぶいと熱と出してゆうつしかれがつかまへてゐて
やろう。ソレよしか。シイ川くくぞふこまぶらぞ。川の中ぶらう
大がい稲へでこりい「ゆハ」ナゼ大がいるとぞふさる「ほん」てゑ山便を
たくのよ。向コイくくくしよんでやるい「ゆハ」「ヤ」だうァつくを。
ゲヱイくト代うチ。いんきよいぞうくなしていて麦ひ「いんきよ」ぞふじやそろ
川のあまうがひし。ちをあらひて

ちやのおうこ。ゑいかいの「ゆハ」どふゆうとうやう。よくなりチこト
ちをとそこがてまじめなかれ。「ほん」のうちよおりしさを「いんきよ」イヤもしふか
うしていろいんきよけろうじんとゑてぞ。ぐぐろたらもうてぞ
こがひよぞ。ゑうれめよあふこころちやくちるそうよ。あしの
海やうふんぶ。ゞんとまるりのがなふなつこぞふせうぞいの
まろ「そしくう。ころちやよあるゐんまの志びんでさけの
りんいこしまきよかい「いんきよ」おンニそふじやゐんまの志びんのあう
がきれいじや。夜の夜でりふ買うてきこまくで。まぶこ
まく夜りせうようせんさらい。それでりんせうこい「ゆハ」あり

ろふる。あやまりやす　浅「どうやら茶碗のちやが
うすい　酒のかんはちびんのよふだ　小八「ちびんの酒がのめ
るものか　浅「そんならモシ佐助さんきまさむかちぞり今のきび
きよふやうるおさんす世　文きよ「きびきよハ川へそつくらの。
ちびんのかうがあらしハさらいきれいじやまいの　ト　桜の二升とちびん
あけて火なちの　うをぬらけて　文きよ「ちやわん茶碗おこせサアくれんすの
さけぶや。ソレおまへもくさつそろへ　ト　ちやわんとちびと　浅次ちろりより
きやせう　文きよ「むかしの多くハちやんどや。さくる　あんぎよふい　いりがら　お火売あ

がつらいう　浅「ハイくと舟のなんでおさりやすと　文きよ「ソリヤ鯨の汗
そつくあわくの寸ぶやさうハ。いりがら　あきたくらふさいなくいくかので
おかんやさと孫。サア小八さんふらトきさハへちやわんとまへ。ちびん
さつてあわやかくぶいぶもおとせいて　一ちいりきうけてぐうとのんで高い　小八「小皮のすずつゆ酒へおつ入　としうつてあつらしきちびんく
別ぶ。ハイあげやせうら　文きよ「ころ会のおちつへひしりづ
あげてくんせ　小八「さるらちつくおかるりの　ト　つぎふれてあちう　どの人まさきと　文きよ「ヤヽ
かうつてくべんとて　ト　ちやわんとわる　ちびんうつぎまする　小八「ソリヤ小皮の
まる。そりやアどふら　ちやわん　小八「十二このちびんハ斬い

大でゑらく「江戸 ヱヽかんぺきしらうよ気がはやくてあかゞ おれ
がせうべんとのむりまでしもだ。病人がいゞだこらへてくれん。
ゲエイ〳〵ペツ〳〵「上方 ハアヽ あの病人の顔をみなはれ。腰〳〵
こんで。おくなから首筋のあたりまでおつく〳〵「江戸 アヽ
りふりてられる咽がさけるよふで。くるしい。ゲエイ〳〵
「上方 よく〳〵おかくんな小便が出る。船でハりよ禁便ままむか
り。そこでいゝしもらんがごかつし
せうばんと人ものませし そのむくい

おのまえものんでとらいまひまをなかり
は騒動よ船中ものくすりなし。大勢はよ実の
うち。かの船へゑやひどくさしのなおちかくあかりすると
見人商ひ船。でまてにもよせし「商人 めし〳〵かいんかいは
のまんかい。かりくるおきてきれよふふきえかろしとある
ト船よつけてよんまなく。さなひまくひろげ。ことの汁らうとのおなさる
ひよつ酒ハかのいひがらよみとやかうとまると人のまくれかなり
さいつもさそかはのがし「江戸 コリヤ 飯 もそうせいさけがあるかい「商人 いふ
さなそうかなかかこ。食でもせしとふてまと「商人 めしもめ

くふか。ソレくらへ。そのちやのこゝろハごふじゃいゆい。ひりじそゝ
鄰しそけつかが。渋ちゃいかい。イヤとのぶらぶらめら。何と
ふざきやアがる。とのけれりむないかり。稱からぬかふて
いかんこい。ぬかかア。あまいしてくらひおれ。何ぬかまぞい。
そして。此ぞも牛房もくきけてけつかる。そのまゝじや。
あいあれこなり。うちで。撲てくて。志りあてこい。の人。イヤ
こゝろふくるちよう。いかなちうつるだろてん。そのぬかし
よふぶれ。あちこ。ほくあう。あしてあれべいか。ちよこ

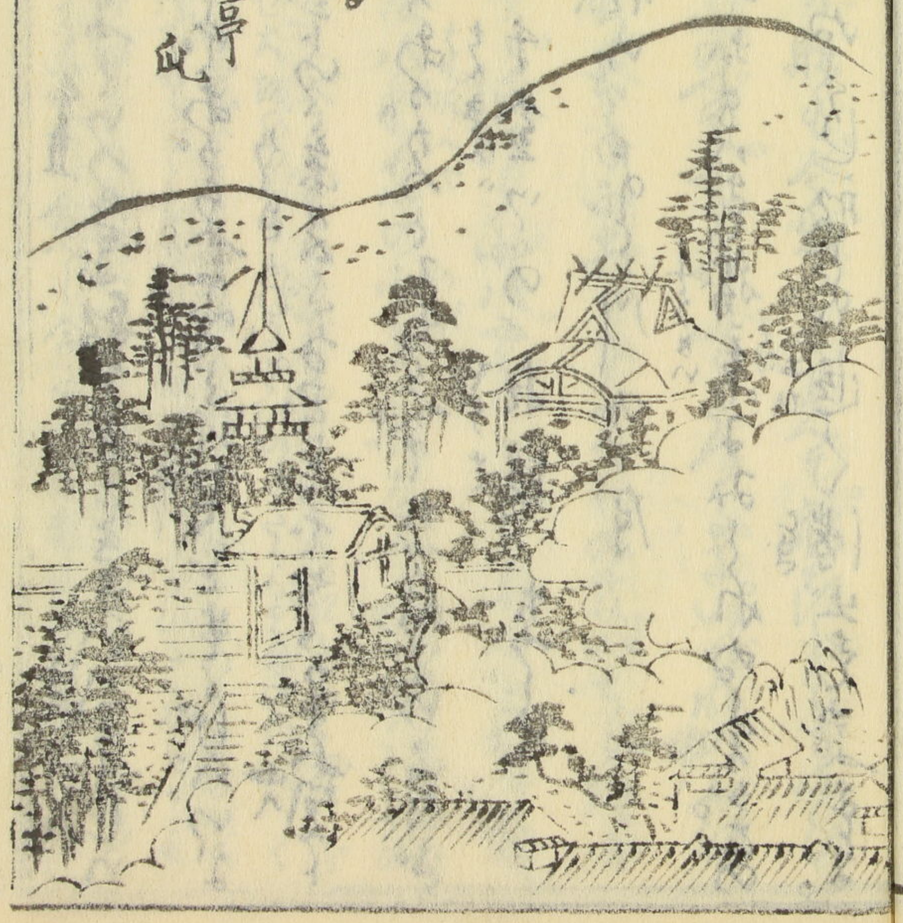
ざいぬきぞぞく。ちやう渋かこせあい。コレそこなかやぢ。渋
ぞふじゃい。このがんどうめられ。ちうこ今ぞりくさつて。コリヤ
ちやうい稱ゆい。さぞやしおどれが少んさいハ。屋ハ種をして
生ちまかるくらふさかい。今こゝろハふつくと獲ふくらして
志ろれ泡ふれてぬよぞい。これがうちれ。大かこ旧案の
蒲洋志やあろ。夏がふりそふじや。あの出んされ。ちやう
いふくされ。イヤこゝろアいこせておきやア。ぞわうも
稱へあらぶ。よこゝろほらアちうぞをぞ。コレくおまい

板(ひら)をてさんをる。アリヤ　そのあきちかひ舟ハ。あるいう
ものを。ぞんざいにいふのがめいぶつ　志やこいの　「こゝれぞ
こゝてあんまりな　「ワアイ　あるうよ〳〵　ト　こゝさうこゝ　「コリヤ
まちあがれ。あるうさアぶれかころさ　ト　ひとうすまさんでおもいぞ　こちあがろひやうしる
のり合のひぎをあんでこゝろ　さうこけるぞちとの　く　「アイ　タ　こゝ　コリヤ　こゝしがぶ　志やかぶ　ふんぞ
長さ　の人　「うんどもがぞん。ふう。よん　大　分　ぞあう　うれさ　アイ　タ　こゝ
「コリヤ　はめんなせ人。ト　やうくにまちうる　かくて船ハ　ひらうさまぞたる
こゝ。あれ　夏催ひのそう。俄に　かくなり　降　ぞ。あれやこ

見るまふ小屋とらく大雨となり　船をとりれば　衆合ハう人
をてこさいぎこち。船頭もかくてハたてられ　員　ぞ
ぞ。やがて　境に船をこぎよせ。志ばらくかりて　ア合せ
けるが。こていハ　伏見と　大坂の　津　途よして　小ちり　船も下り
小林も　こゝ　落合　混雑し。ぐらひしと　岸によりて
今やこ　霧と　まちつるに　およそ　一時あまり　過さると
おがしき　沈　漸く　夏やこ　雲きれて　月の　新ハ　こ山に
さし出るに。船中おのくいきこゝち。沈けられハも　こま

いきあけ。敷きし出して。此りい志よくとながめいるが。ハア
りふ何ン時ごろかな。こゝはよ小ハ。又こまのことがあるよい。雪
陣へゆきてくなりて。アてきて稀くとまろりいふ。どふも
船でいてはぬ。イヤさはらいちふかくいてなりうち。ちよろ
ちよへあがりて。ゆらいしてこよふ。おこ二よその船でも。人が
手あるあがるよふまとぶ。ちやくそふ志なせべイヤころちも
おおけかきてくなるて。モシ船頭さん。ちよくとあがりて
まるいかいか稀へ。刑ことなるうちやらいてごんせしらが

八幡山
轉
法の山
交ハ
なりなて
牧生人會
東牆亭
一瓜



今めしくて出りふといつきまゝ船を出さきたい（ほれ）ならじい
ぞこぞ（ゆへ）十二サんざしであがらふ。をゆるとれ（あし）をまゝげいいよ
ト（あ）くあほより（ほれ）つくふあがりて（ほれ）ナントいて（ひしき）案ゆるぶる。ごとくでやらかそふ（ゆへ）冒ト
そこにいあ（ゆ）深りがある。ものとそちらへ。ちゆるわどい、月ぞ
一刧（ひとく）を千金（せんきん）ゞの（そう）お場（たち）ちゆる
三十石（こく）のよど川の月
かくくちぞさえて。おもはぎ勝（まうれい）案をみとれぬるが。この
うち。岸（きし）はかりぬるし船ども。追（おひ）く潜（とぎ）出をゆふまゝ。

ゆへ。浦ほが案ゆる船も。今出ると見えて。船ほどももゆひ
縄（づな）とし。棹（さい）さしのぞ。ふうをとゆ（よび）ゆるゆるまゝ。いづれのふ縁
ゆも。案合のうち。ちよふにあがりゆるものたいちゞ。ほとに
おゆゝちゆ深（こんぎ）難しゝ。浦ほゝゆへ。ゆうくのこふ。人をおし分。
（しびのり）船ゆふゆるへ。大坂（おほさかんや）へ。ゆのがり船なり（はゆうりあまり せんどうよりよび）
そこにれて。大江ようろこへ。今まで。のつて来りし。伏見の船とゆえ。そのつぎ
ゆるゝびてかりぬるし。大坂ののがりふほよとびのりゆるが。夏の間ゆらく
まちがひゆるふほとも。公付ぞ。ことさら。此ふほにも。案合のうちづくこふのがり
ゆるものも。こゝへあれば。それらかとおりひて。船中にも。こがひにかわもうこち
も。あれば。これとこがむるものもなく。そのうちふほへ出るにまかせ。おのく
夏ようりまゆしつかれるゆや。おし合へし合。こがひにあしとゆうちがひと泊し。

とうらいてゐれば。どんゐこの志らぎ。りとより 伝 川ふれ 彩いてを。是から
大坂へのいさてだうりんは。是いきあて
長所の分 洞 河内やゝゆらいふ宿屋へいつてあれも大
和の初瀬の葉やで。よこしこ書付のあるこから。あそこへ
こまりて。まぶふ芸姑でもゐんよふじやア稲へ 一 おいらア
まこ。彰所とゆらいまもやくゐて人 伝 ぐそれもまんざらで
稲へのアゐこどうてあつい汁ぶぺつくく 此くらゐらゐも 字あがりの
三郎人がれおやじく 一 を主米さん。おまい虎屋のまんぢうれ
きくとまるがう
ぞしこぞいの 一 古 えきんきんせ。けれなころちやきのふ

つぎくあ 彼所 行 買 えんと大佛屋にこまされる
こいのつれの人 一 法い一トもしていて 取 そでどんせ。 夜からこぶか十
里わかなかもせんりの 一 しそふいふてもこれんがよい ハ
此たるしときいて 一 もし あるこうが。今いひなさろこ。こらやと
いふへこしか大坂でどぎいやきとね 一 さよじやこいの 一 その虎
やのまんぢう。こまれこておつしゆうこ。大佛やゝゆらへでこそ
ぞんやさと 一 コリヤ 彰所だし 西結を南へいくとこじや
こいの 一 その彰所だし 南へいく所までは。夜からいくら

いふさじやないかい（ぞん助）ホンニこれじやこれ（ちゆうしひかくて）
（浦江）コリヤ何ひろぐ。此つゝ三ハおいらがのぞ（そん助）ナニぬかしくさる。
おごれらやぞなてたゝらぬくさるな。コリヤ見ん。ふつしきこの
たしふ。どちの名がかいてあるこれ（ゆくしこれ）ト（いこまて）（浦江）ひつくりしよくこれ（ゆくしこれ）ド（ぞん）の
つゝこそなし（きもそうぶして）（浦江）ホンニコリヤまちがいさ。ソレ（ゆくしこれ）ぞ。おいらがのへ
ごとにある（ぞん助）あんぐらつくせ。ナニおごれらがつくこと。これが
志ろぞい（浦江）こいろへ法まら稱へ。ハ八ぞふしさ（小八）おめへおれが
のもこれて。一ツ正なつんで。ぞいにおいてドヤア稱へ。ぞせて

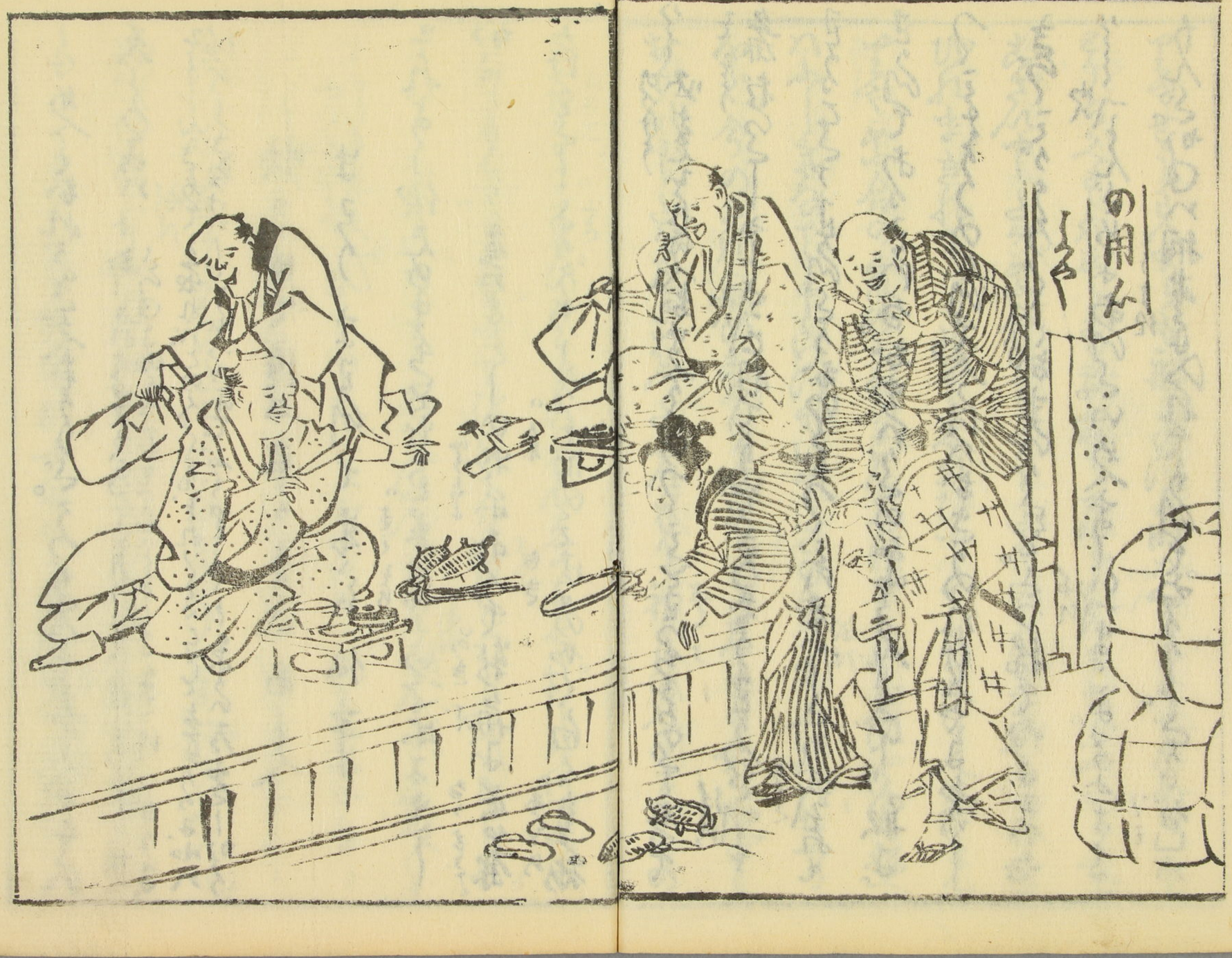
おいらが志るあぞ（浦江）ハテめいよふなモシいよくてへ。ふし
見なちぢへ稱へかぬ（ちなく）ハ何ぬかしくさるゆらアノ（つら）（ぞん助）見ゆせ
けさいなつらじやな（小八）イヤといつらハふてへゆうぞ（ぞん助）ふといも
ゆまいもいるとろちやなんとらいこうでおごれらアがんぞう（苛）（盛）
志やつゝこに別（ぐつ）（ぢゆう）案なんきうハゆるしてこまきこれとて
出ていにくきれ（浦江）コリヤアこんぞめにあふがさろさりこうら
ぬ。さて八ぞふしさのぞろふ（小八）されば。ころちもこりらぬぜん
てへゆふ屋ハ何日（いつか）ぞろけ（浦江）ゆくとうと。ゆふ屋あの志ぶんな

月が出さうら。大かた廿四日あたりぶ「今月ハ大かゆか
きのふハなんの日ぶ孫へ「されバとうと。はるソレごとでら
こまろと時甲子ぶてくいろとじやア孫へ「ソレ〳〵。あの茶
服ハうまかつた「ひらの牛房の大きさ。おいつハめづらしい
ほ〳〵「ハコリヤごふでもてきたハなんぞまじやないといハ
ト たらせぢをよろて大きらひきるとの中でも「ハ今きこえさまとが
こしぶいの者多人志ぶらくらんがつて
あるといのなるなどおまりかしとうも見へんとろとち
志やさうい人のもの。手まるなどのまさらぬハあまやせん

こいコリヤとうじやコンそとなるとろとちゆふ屋伝ひんりう
のうんして途中で船のうつてこ紀年としかるつてこ
へでもあがらんとさがあろがる「さあうでたぞりやまと
「ソレ見ふんせとろこうがの所こ船ハもおの月あがりおつこ
人が大分ありおつこがやうて船が出るといふとこなうろ
えてのりおつこその時とちゆんとちハ下り船とのぞり
船をさりちがへてめんくの家てまた船とこちえこちの
ゆ孫へのうんとものてうるあろぞい「あンニさあうでよじざ

やせうこうちらも船よの間と時へ。ちらがりでへあるし
そりちがくことへ志らざ。ぞふ居どこへもちがふこよふで
おぎんやしこが。案合のこぐこからまゝのかへとそれなりにふこ
びれまぎれよッイ稱て志ゐひやしてはきこゝへ来てさん
やや。案合の流のうちよ。見志間とかへがひとへも稱へ
へふしぎなこぐこといへしこのきへ(孫注)そふいへべちかる
なぐ。今のさ紀船のあがり場でハテ見こよふる所ぐこと
おかひやしこが見こさんぐこ。ぞうさり初(志よて)よのふしこぐこもの。

ひしゆうけう 必ずまんそれ御人おまへかこのつくこゝをこうちらのぐて思つて
そこそう 条ねいこしやしこ(ゆへ)これでものがさうぞりこうろこ(孫注)イヤ
こうるこゝア。こうへこがおいらがつくこへぞふしこうふ(たこく)それも
こうへてあるこへな。おまへがこのあふらんしこ。下り船よ。
つくこまうのこへて。今は(ハ)おきうのハけんやよ。ぞうし
きづくこがうろくとおまへがこをと。こつ稱てゐよぞへな
ひしこ(ゆへ)へんぐめよあへこ。いめへましい(孫注)まこよ。ぞふさる
りんぐかゆへ胴(とうまる)まへれてもへてゐるからこうぐ包(つこ)へ



くさめしておれがきがへむかりぞよ。ちちりてまゐへまゐといへ
あがらつしやれハト助しかれなせんがなく。それから又おはまのりて大坂へ
かうのぼりゆくもおかくなあいとまをくまかべのつかりけま。
みうけんきつめて立まれバこの人くもまされくるこくとを金乃かまか小八
ほりやうきなけのしくうわつきぬるふかいしくとあらいたまきしかう

伏見へ出て淀の車がまき　あと人

まよりまよ河て来られ　御車

それより彼んの手ちを折の墨摩しいろはにさし

かつまさるが義八まことしの妙ふありて新舞に若摩

うけるもてしうちちより衣のくまるのゆく白く。あとめ

の布子に帯ひろうどのえんまでおしろいべつたく
つけたる女も。出て汗汁しが袖をとつてへ「かしな
まのりなされちよつとおそじんかいな」汗八「なんぶどうせずく
トいふきけバ又へ女「おまへさんおおふおまいかいな」小八「こつちおまいな」
べつたうとう小八をとらへ女「ヨ、まゐんちちやいやいな」小八「いやいなのこゝふよし」
ひで来ぬでもつまりんのぶ二てたなまをやアガ」女「ヨくとへ
あつえなしてへ「リアてがおもできなくまてぞめがた
まるくぞ死の女中の方の白さん

石灰(いしだい)蒸(ぐう)の稲づくゝどろも穀(か)
浮(ふかく)家のさとは家ごとに焼(やき)もの。古細(つちざいく)を高(あきな)ふ見あれば
やきもの牛(うし)の御ふる賞(か)うくも
よごれ　こらして見とれてそされ
かくて茂(かず)のもりにいたりれるに
稲(い)春(なり)山松のふぐりにかゝまきれ
ふごしのさかり茂のもりかな
ちゝにいちりの社(ゆしろ)をふしおがこつて小八ナントそこらで

一ッふくやスうぎやア稲へか浮代よかろふく トよしざこそかけ
ふるちやこせうま
まつりて浮代ヘヨアあまざけがあるのだあきん一ッぱいくんなに
ハイ〳〵ぬくふしてあぎよまいな小八コウ浮代きんこてのだあ
さんがかゆるよ乳があると見えて。アレとろちだかり見て
おかしな同つ紀とまとうア浮代だかアいへだあさんぞふざ
ちやくくんな浮代まちにまちにまつておくれんかいなー いひつ比
だ浮代
浮代のかゆを見ていなきゆへ見ていなきまるゆへふしぎよおもひ浮代だあさんぞふぞしこゝおめへ同が
見るいのか稲浮代見しやおまいのかゆを見ていかうかなまう

てなもんだはなへそりやあふしてワアイくさいつハおかしい
おまあさん似がかるしいよしやけあらぐひくりのむきこと
うしなみてがそのむきとふア おらが似てくるそらく
ハア おいらに似たと人それじやア おめへのむきこともいつて男
であつころうにおかしいまとしさツしてその女がまんどへ乃
なのむひとら。おまいのせうに穴しあらいころちやがあつて。
色がくらかて。さる八相く争くやうで目のいろうら木
までが。そつくりじやよいおくそれじやするちが新の
こなん家むらうがよく似とのよいにむらうもきがつ尽く
のくあいひとつも様をせんものをそれむらりおや たのん
よいの。アノ斤小紙屋のちげきんくも要までがあるいかも
みるものらいま人の顔の店おろしがきんぶくろ。よき績く
をまうらんなりんにほまをれさよいはトちやうちんやろふにあまずけをらんで
さしらぶまをやうり みがらこれをのんだ ぎやうまさい膳ぶうまいもなり
まへしさぶやあろよしやうなあつて。ツイ滅とそのなう人
おとしそうはみよさんぶまと滅なきのおくまぐしも。

てれなものぞ。そしてとの石とるんや悪るいく

大佛(ぶいがつ)の御堂(ごどう)をも雲(くも)に入してや

ちれハ大きな　ものし　天(てん)上(じやう)

かくようてふ門のうちゆへ。やがてはまふのぞ

道中膝栗毛六編上編終